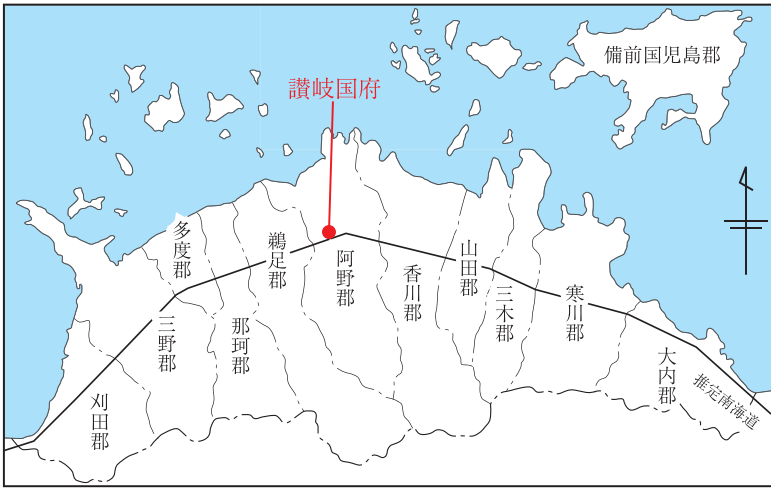


香川県坂出市府中町所在

讃岐国府跡の発掘調査

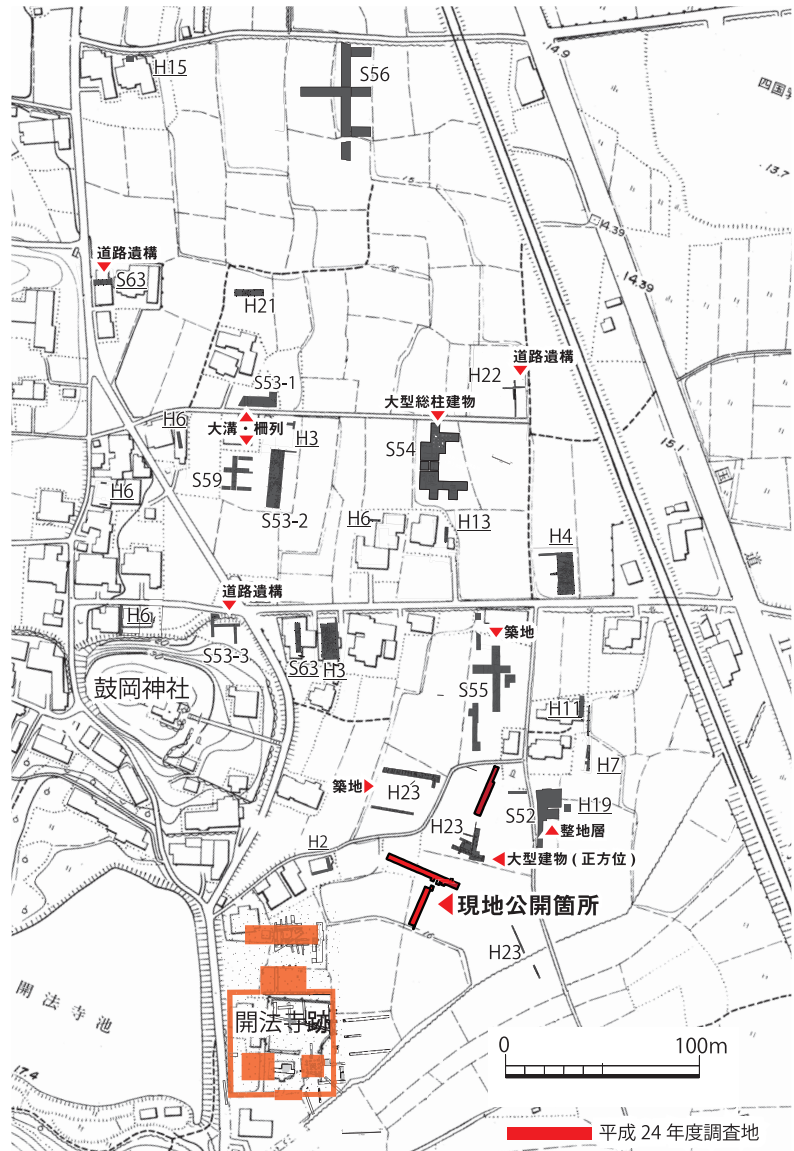
平成25年2月10日 香川県埋蔵文化財センター



讃岐国府の位置



▲ 讃岐国府周辺の歴史的環境



▲ 讃岐国府跡における発掘調査地点
坂出市都市計画図1/2500を62%に縮小

1 讃岐国府とは

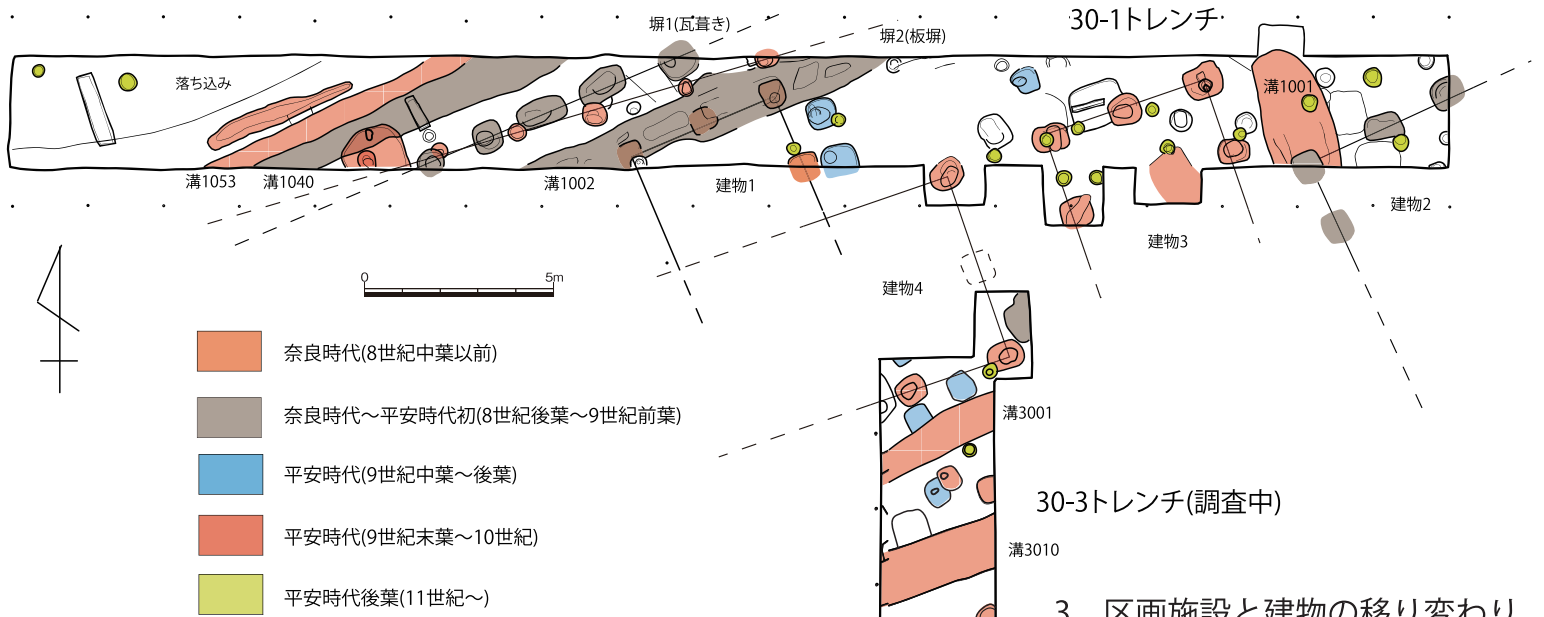
国府とは、奈良時代(約1300年前)の古代国家の設立とともに、地方統治の中心として国ごとに置かれた役所で、現在の都道府県庁のような施設です。讃岐国府は、奈良時代から鎌倉時代(約700年前)にかけて機能し、菅原道真(845～903年)が国府の長官である讃岐守を勤め、崇徳上皇(1119～1164)が晩年を過ごしたことで有名です。

国府は、都や国内の郡^{ぐんが}との連絡がとれるように交通の要衝に設置される事例が多く、讃岐国府も付近に官道^{なんかいどう}の南海道が東西に通じ、瀬戸内海と綾川を介して約4kmで繋がるなど、陸・水上交通の接点となる場所に営まれています。また、周辺に建立された讃岐国分寺・国分尼寺^{さぬきこくぶんじ}などとともに、讃岐国の中心となる地域を形成していました。

- 政庁 せいちょう(国庁 こくちょう)……国府の中でも中枢となる施設で、儀式や政務の場
- 国衙 こくが……国庁や行政実務を行う曹司などの諸施設群の総称
- 国府 こくふ……国衙や国司の宿舎である国司館、市などが営まれた地区全体の総称

2 調査の成果

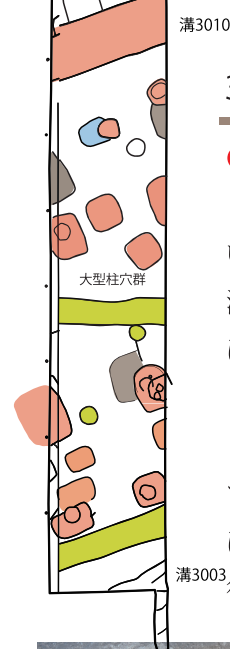
奈良時代から平安時代にかけて溝や塀によって囲まれた区画と、その内部で瓦葺きの建物群が検出されるなど、これまでの讃岐国府跡の発掘調査の中でも、最も明確に遺構・遺物を確認しています。



▲ 建物を囲む瓦葺きの塀跡 (奈良時代~平安時代)

塀の両側に溝が掘られています。溝の間に柱穴が並んで見つかったので、瓦葺きの掘立塀の可能性がります。

30-3トレンチ(調査中)



3 区画施設と建物の移り変わり

● 奈良時代 (8世紀前半)

この段階の明確な区画施設は確認されていません。建物1は、後の時期に掘られた溝1002に壊されています。30-3トレンチにおいても、方形の柱穴ちゅうけつを数基検出しており、周辺にも建物群が広がっていたと考えられます。建物方位が条里型地割じょうりがたちわりに合致している点は注目され、讃岐国府成立と同時に南海道の敷設や周辺の土地開発が広域に行われたことを示す可能性があります。



▲ 溝からの瓦が出土した様子



▲ 瓦葺きの掘立柱塀 (一本柱塀)の想像図
ほったではしらべい
 いっほんはしらべい

●奈良時代(8世紀後葉)から平安時代初め(9世紀前葉)

瓦葺き堀による区画と建物2があります。瓦葺きの堀は、溝1002と溝1040に挟まれた幅が約1.5mの部分で、両溝からは屋根に葺かれていたと考えられる多量の瓦が出土しています。溝と溝の間に大型の柱穴列があるため、瓦葺きの掘立柱堀の可能性も考えられます。

この堀の北側の30-1トレンチの西部では地形が低くなることと、南側に建物2や、30-3トレンチの同時代の大型の柱穴が存在することから、区画の北限を示すものと考えられます。

●平安時代(9世紀後葉～10世紀)

平安時代(9世紀後葉)には、前段階の位置を踏襲しながらもやや方位を変えて掘立柱堀(板堀)が建てられています。堀より南へ約5m離れた位置に建物3・4が並列して建てられています。建物3は東側に溝1001、建物4は南側に溝3001を伴っており、溝3001は建物4に伴う軒下の雨落ち溝です。現在調査中の30-3トレンチでも溝3003・3010に挟まれた範囲で大型の柱穴列を検出しており、継続して大型建物が営まれています。これらの建物は、9世紀の後葉頃に掘立柱建物として建てられ、10世紀に礎石建物に改変されています。

●平安時代後葉(11世紀)

11世紀には、建物の柱穴が極端に小さくなり、区画施設もなくなります。国府内部の建物構成に大きな変化があったことが分かります。

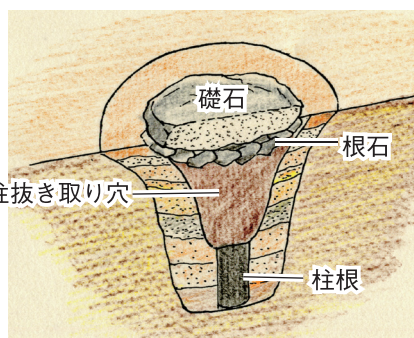


▲ 継続して建てられた建物跡(建物2・3奈良時代・平安時代)

継続して建物が営まれる理由には、この場所が讃岐国府の中でも重要な区域であったからと考えられます。



▲ 大型の柱穴(建物4・平安時代)



建物基礎の変化

◀ 礎石想定図

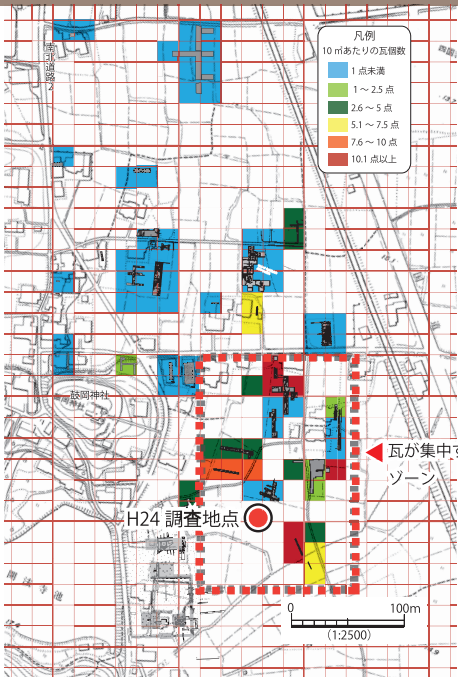
柱を抜き取った後に、礎石を設置したと考えられます。礎石は失われて、根石だけが残っています。



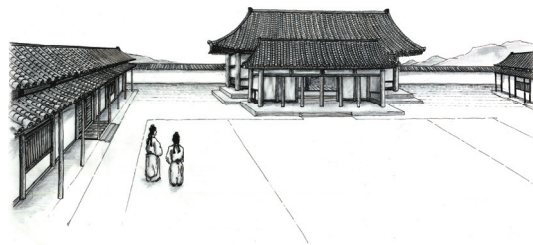
▲ 溝から出土した瓦と焼けた土の塊(溝1001・平安時代)

近くにあった瓦葺き建物が焼け落ちたのでしょうか。多量の瓦とともに、焼けた土の塊が棄てられています。

4 讃岐国府の中での瓦の出土状況と今回の瓦葺き建物の関係



讃岐国府の昨年度までの発掘調査で、奈良時代から平安時代の約 1.2t の瓦が出土していますが、これらは推定地南部に偏っています。今回確認した瓦葺き塀や建物は、瓦が集中するゾーンの中に含まれています。これは、今回の発掘調査範囲外にも瓦葺き建物が広がることを示しています。

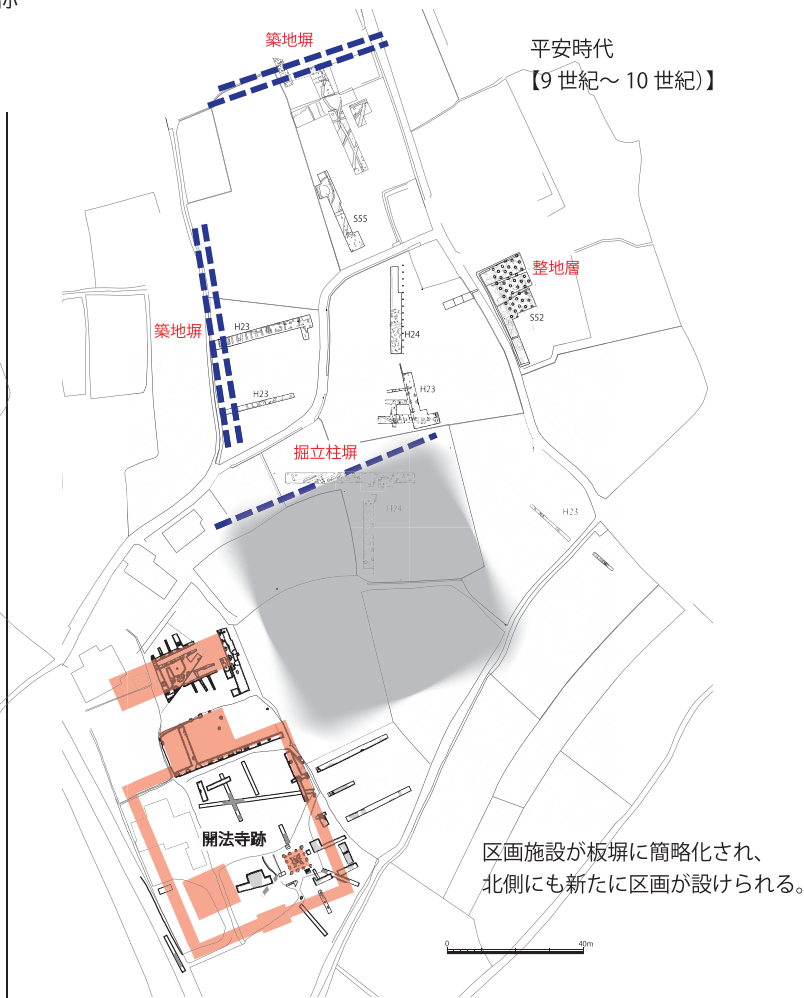


▲ 讃岐国府瓦葺き建物の想像図

5 区画の大きさ

今回の確認された奈良時代から平安時代の瓦葺き塀や板塀が区画の北限であれば、区画全体の大きさはどの程度であったのでしょうか。西側に奈良時代初めまでに建立された開法寺の伽藍があることや、隣接する平成 23 年度の調査地で検出していないことからみて、区画の東西幅は最大で約 70m を想定できます。南北方向の広さを推定する材料はなく、現状では、南に綾川がせまる地形などから一辺が約 70m の方形区画と捉えておくべきでしょう。

▲ 讃岐国府跡における瓦の分布図 坂出市都市計画図1/2500を35%に縮小



6 まとめ

讃岐国府推定地のこれまでの発掘調査では、南北約 500m、東西約 300m に及ぶ広い範囲より^{りよくゆうとうき}緑釉陶器などの貴重品や^{すずり}硯が極めて多く出土し、点的ながら古代の建物や溝が検出されていました。これらは讃岐国府の存在を十分に示すものでしたが、今回の発掘調査で奈良時代から平安時代の区画施設と大型建物を面的に確認したことで、讃岐国府の所在地が確定しました。

全国の調査事例から、瓦葺き塀による区画施設は、国府の中でも政庁や、それに付随する国衙などの中枢施設に限定して設けられることが知られています。また、区画や建物群が、奈良時代から平安時代にかけて同一地点に踏襲されていることは、今回の調査地とその周辺が讃岐国府における中枢施設域であることを示しています。

